

『ゴルフとは、自らを自らで励ますこと。』



バリューゴルフ
VALUE GOLF
www.valuegolf.co.jp

新しいゴルフ

年が明ける。今年もゴルフ界の話題は、胸が踊るほど無数にあると言っている。海外ツアーで活躍する松山英樹をはじめとした選手たち。ミレニアル世代のあとを追う高校生や大学生の活躍。その中で、なんとといってもゴルフファンの目をひきつけているのが、蟬川泰果である。昨年10月のメジャー日本オープン選手権で、圧倒的な存在感でアマチュア優勝をした。1927年（昭和2年）第一回の開催で当時アマチュアの赤星六郎が優勝して以来、95年ぶりの快挙であった。およそ100年間、この大会は、プロが制してきた。プロフェッショナルの技術と力量がなければ、このトーナメントを制することはできない。ところが、蟬川は4日間を通して、圧倒的な飛距離とパターをはじめとした小技で他のプロの追随を許さなかった。しかも彼は、名前のとおり、子どものころからあのタイガー・ウッズに魅せられてきた。その影響もあり、昨今のプロの選手たちが忘れていた、ギャラリを喜ばせる、ギャラリを魅せる、そんなゴルフを目指しているという。3日目の土曜日の9番ホール。303ヤードに距離が変更されたパー4に、トップを走っていた彼は、グリーンの手前で球を置き、2オンを狙えば、別に問題はなかった。ところが、迷うことなく、なんとドライバーではなく、3番ウッドでフルショット。ボールは見事にグリーンを捉えた。

1980年代に活躍をしたジャンボ尾崎や、青木功の時代は、コースのギャラリはもちろん、テレビの視聴者もこんなゴルフに魅せられていたのではなからうか。蟬川選手の登場で、日本のゴルフシーンは、再びショーとしての要素も楽しめる時代が来たのかもしれない。

ゴルフは、自然と人間との戦いから生まれる競技である。なので、実は一番大きな課題は、地球の温暖化がもたらす自然災害である。猛暑の中でのプレーは、選手のコンディションに大きく影響し、プレーのあり方も少しずつ変わってきている。雷や雨でトーナメントの日数が短縮されたり、そのためのコースコンディションや、芝の種類まで対応せざるを得ないこともしばしば起きている。と同時に、ゴルフという競技を応援しているファンの方々が被害に見舞われたり、またフロリダのように街全体が風や水の被害にあったケースも出てきている。その意味でいわゆるSDGsの活動との関係を深めているトーナメントも出てきた。

自然と戦うゴルフ、まさに地球を象徴するスポーツとも言える。



戸張 捷 Sho Tobari

1945年、東京生まれ。高校からゴルフを始め、3年で全日本ジュニア3位、大学4年で日本アマ9位。住友ゴム工業（現SRIスポーツ）に入社後、株式会社ダンロップスポーツエンタープライズへ出向。トーナメントディレクター、プロデューサーとして日本ゴルフ界に貢献した。現在は、ゴルフキャスターとして活躍するほか、ゴルフトーナメントやイベントのプロデューサー、コンサルティングなども手掛けている。